

『就実論叢』第四号 抜刷  
就実大学・就実短期大学 二〇一五年二月二八日 発行

〈資料紹介〉

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

与謝野晶子自筆歌稿「輓歌 上田先生のために」

加藤美奈子

## 〈資料紹介〉 倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

### 与謝野晶子自筆歌稿「輓歌 上田先生のために」

加 藤 美 奈 子

#### 一 倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」所収

##### 与謝野晶子自筆歌稿「輓歌 上田先生のために」解題

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」(以下、「泣菫文庫」)所収の与謝野晶子自筆歌稿は、本論叢第四〇〜四三号掲載の拙稿において紹介した一二枚が確認される。「泣菫文庫」には更に、泣菫宛晶子書簡が一五通所収されている。倉敷市編著『倉敷市蔵 薄田泣菫宛書簡集 作家篇』(八木書店、二〇一四年三月)に続いて刊行される、倉敷市編著『倉敷市蔵 薄田泣菫書簡集 詩歌人篇』(八木書店、二〇一五年三月刊行予定、以下『詩歌人篇』)にそれら一五通の翻刻・注・解説の掲載を予定している。

本稿では、『詩歌人篇』掲載予定の大正五年七月一七日付泣菫宛晶子書簡に同封されていたと推定される自筆歌稿を紹介する。同書巻末の「解説」には、同歌稿の翻刻を示したが(同歌稿は、親和女子大学国文学研究室編「薄田泣菫来簡集」(「親和国文」(昭和五九年二月))に既に翻刻が掲載されている)、初出紙・所収歌集との異同等は紙幅の都合上、割愛せざるを得なかった。この晶子自筆歌稿には、「輓歌 上田先生のために」と題された上田敏追悼歌一〇首が示されている点でも、特に重要な歌稿である。本稿では既に本論叢で紹介して来た一二枚の晶子自筆歌稿同様に、初出紙面とともに図版掲載し、表現の異同の有無等を比較・確認しておきたい。

上田敏(明治七(一八七四)一〇月三〇日〜大正五(一九一六)

年七月九日、病没)は、明治三三年四月の創刊時より「明星」に寄稿し、晶子の『みだれ髪』(明治三四年八月)への書評も同誌に載せ、「みだれ髪」は耳を欲てしむる歌集なり。詩に近づきし人の作なり。(中略) 詩壇革新の先駆として、又女性の作として、歓迎すべき価値多し」(「明星」(明治三四年一〇月)と、いち早く評価した。上田敏は、与謝野寛・晶子にとって、「博士」という権威を以て文学を牽引する役割を担う文学者であった。

上田敏はまた、明治四一年に京都帝国大学に赴き、同時期に京都に在住していた泣菫とも親交があった。「泣菫文庫」には泣菫宛上田敏書簡九通が所収されており(『詩歌人篇』掲載予定)、「大阪毎日新聞」に掲載されて好評を博した泣菫による『茶話』にも上田敏の名が屢々見られる。一例を挙げる。

島村氏の健康を氣遣つた上田氏は、不<sub>ふ</sub>凶<sub>と</sub>した病氣から脆<sub>もろ</sub>くも倒れてしまひ、草<sub>く</sub>臥<sub>たひ</sub>れて欠伸ばかり続けてゐた抱月氏は、その後ずつと健康を恢復<sub>とが</sub>してぴち<sub>ち</sub>く<sub>く</sub>してゐる。

〔抱月氏〕(大正五年二月一日付「大阪毎日新聞」)／薄  
田泣菫『完本茶話』上(富山房、一九八三年)

このコラム特有の皮肉とユーモアを通して、早逝した上田敏に折々言及せずにはいない泣菫の哀悼の念が思われるのである。「泣菫文庫」所収の泣菫宛与謝野寛書簡(大正五年八月四日、『詩歌人篇』掲載予定、以下同断)でも、次のように「殊に御親しかりし大兄」と、泣菫と上田敏の關係に言及されている。

上田敏君突然の長逝に会<sub>あ</sub>ひ近<sub>ちか</sub>来<sub>き</sub>いろく<sub>と</sub>昔日を憶<sub>おも</sub>ひ出す事多<sub>し</sub>く候。晩年の上田君と殊に御親<sub>おん</sub>かりし大兄も定めて御感慨多<sub>し</sub>き事ならんと存<sub>ぞん</sub>じ申<sub>ま</sub>候。

寛はまた、翌年の大正六年七月一五日付で泣菫に宛てて、「柳村博士の一週<sub>いっしゅう</sub>年と相成<sub>あひ</sub>り候をおもひて心中涙のにじむを覚え申し候」と、上田敏の一週忌に感慨を伝えていた。

さて、泣菫宛の晶子の書簡は、「泣菫文庫」に一五通が確認され、『詩歌人篇』に掲載を予定しているが、その中に、上田敏の逝去に際して、自ら追悼歌を詠み、泣菫に「大阪毎日新聞」掲載を求めて歌稿を送ったことが伺われる文面がある(「親和国文」(前掲)に翻刻掲載)。

上田様のことのき、候てふともの、こゝろほそくおもはれ候ことかぎりなく候。輓歌十首をこれは日日へもおくるものに候へど御さしつかへなく候はゞあなた様の御欄のかたすみへ御のせ下されたく候。

書簡は、大正五年七月一七日付で、上田敏の逝去後一週間程で送られていた。泣菫宛の晶子書簡の多くは、「大阪毎日新聞」掲載のため依頼原稿についての応答で、原稿の遅延や違約を詫びる文面が多い中、上田敏への追悼歌は、自らの哀悼の念を止み難く伝えているものではないかと右の書面より推察されるのである。また、泣菫の編集する「大阪毎日新聞」の文芸欄に対して、晶子が「あなた様の御欄」という意識で寄稿していたことも、泣菫との関わりを端的

に示していて興味深い。「これは日日におくるものに候へど」とあるように、この追悼歌は、大正五年七月一九日付「東京日日新聞」に「上田先生を悼みて」と題して一〇首、「大阪毎日新聞」には、「上田敏博士を悼みて」の題で、大正五年七月二四日付で一〇首が掲載されている。

本論叢でこれまで紹介してきた「泣菫文庫」所蔵の二二枚の晶子自筆歌稿については、発表時期等から推して、その「送り状」に該当する「泣菫文庫」所収の晶子書簡は、現時点では確認出来ていない。この上田敏追悼歌は、歌稿と書簡の内容が明確に一致し、どのような意識で泣菫の元へ寄稿されたかが示され、かつ実際に新聞二紙に掲載されている点でも貴重な資料であると言える。

さらに、『晶子新集』（阿蘭陀書房、大正六年二月）には、「以下十七首上田敏博士を悼みて」と題した一七首があり、その内、前半一〇首が、歌稿所収・新聞掲載歌である。

## 二 与謝野晶子自筆歌稿「輓歌 上田先生のために」図版翻刻、掲載紙面

以下、大正五年七月一七日付泣菫宛晶子書簡に同封されていたと推定される「輓歌 上田先生のために」と題された自筆歌稿の図版（**図版1**）・翻刻を示し、大正五年七月一九日付「東京日日新聞」掲載の「上田先生を悼みて」（**図版2**）、大正五年七月二四日付「大

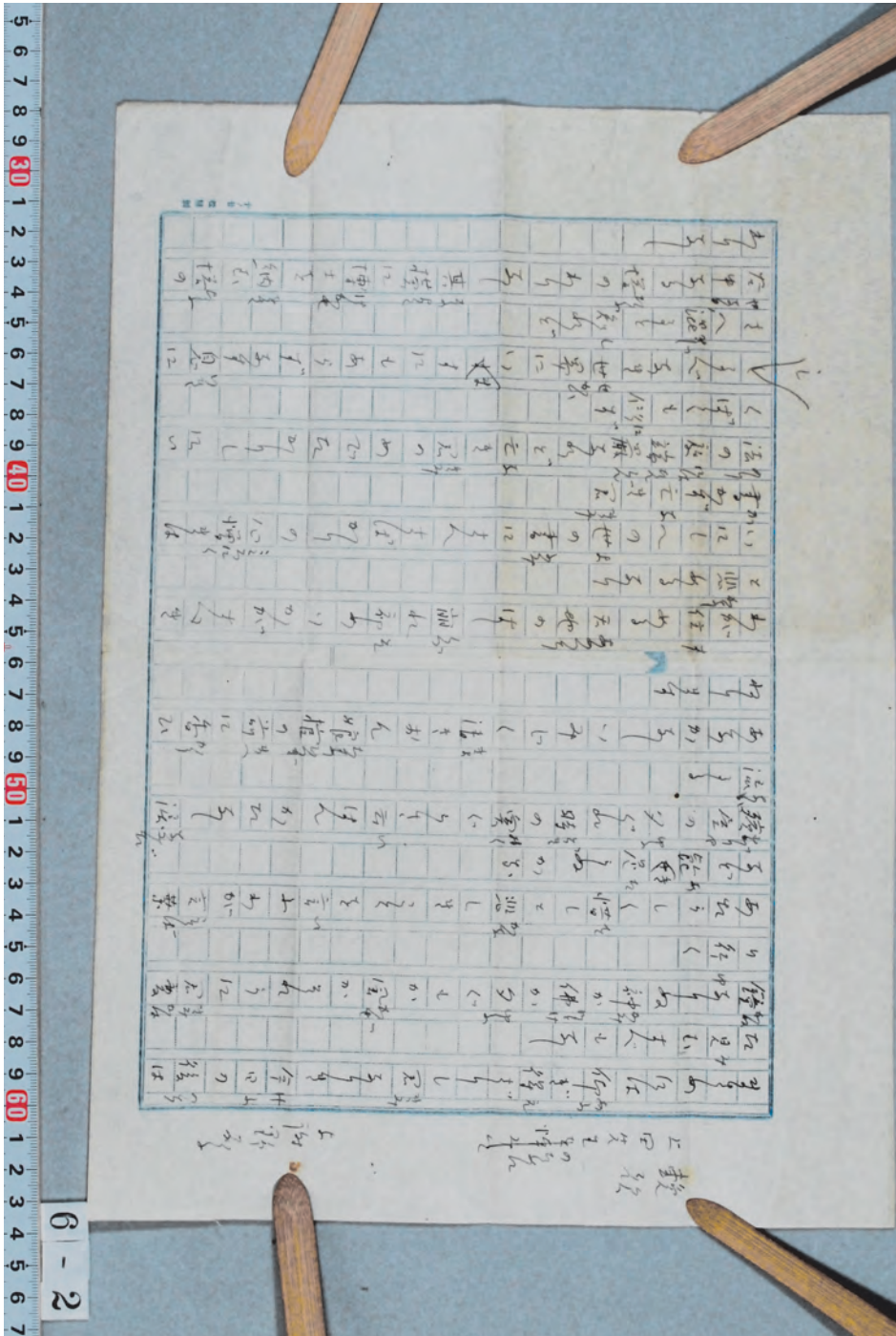
阪毎日新聞」掲載の「上田敏博士を悼みて」（**図版3**）、加えて、『晶子新集』所収「以下十七首上田敏博士を悼みて」を引用し、表現の異同を確認したい。

**【図版1】** 与謝野晶子自筆歌稿「輓歌 上田先生のために」。用紙は、縦約二六cm×横約三六cmの洋紙、「B4」サイズに相当し、青罫の四〇〇字詰原稿用紙で、「十ノ廿 松屋製」と左下欄外に印刷されている。黒インクのペン書きで、右欄外の題、「上田先生を悼みて」の「を悼みて」を縦線で訂正し、「上田先生のために」として、下方に「与謝野晶子」と署名している。画像は、倉敷市（担当・文化振興課、撮影・就実大学吉備地方文化研究所）の許諾を得て掲載している。印刷の都合上、画像の周囲をトリミングし、色調に若干の調整を加えている。

**【図版2】** 大正五年七月一九日付「東京日日新聞」掲載「上田先生を悼みて」および、**【図版3】** 大正五年七月二四日付「大阪毎日新聞」掲載「上田敏博士を悼みて」は、国立国会図書館所蔵のマイクロフィルム複写によった。

後掲『晶子新集』（阿蘭陀書房、大正六年二月）所収「以下十七首上田敏博士を悼みて」は、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」の画像資料を参照した。

【図版1】与謝野晶子自筆歌稿「輓歌 上田先生のために」



〔欄外〕輓歌

上田先生を悼みてのために 与謝野晶子

まさめには仰ぎ得ざりし君なりき今日の後は  
た見むすべもなし  
鐘なりぬ神か仏か夕ぐもか風かそれらに君変  
り行く

あたらしく惜しと悲しきことを言ふわが言葉  
など飽き足らぬかな

殯屋の夕ぐれ時の奥ぐらさ云はんかたなし涙  
流るる

あなかなしいみじく清きおん娘棺の前に香ひ  
ねります

わが住める天地のはし崩れ初めいかかすべき  
と悲めるなり

いにしへの世の書にさへさばかりの心憎きは  
書かず亡き君

法の庭端殿なれど亡き君のためでたかりしにい  
くばくも似ず

しるべなき世界にいますにもあらずなす息に  
さへ混ると知れど

谷中なる塔のわりなし其横に博士を納む塔の  
わりなし

上田先生を悼みて

與謝野晶子

まさめには仰ぎ得ざりし君なりき今日の後は  
た見むすべもなし  
鐘なりぬ神か佛か夕ぐもか風かそれらに君變り行く

あたらしく惜しと悲しきことを言ふわが言葉  
など飽き足らぬかな

殯屋の夕ぐれ時の奥ぐらさ云はんかたなし涙流るる

あなかなしいみじく清きおん娘棺の前に香ひ  
ねります

わが住める天地のはし崩れ初めいかかすべき  
と悲めるなり

いにしへの世の書にさへさばかりの心憎きは  
書かず亡き君

法の庭端殿なれど亡き君のためでたかりしにい  
くばくも似ず

しるべなき世界にいますにもあらずなす息に  
さへ混ると知れど

谷中なる塔のわりなし其横に博士を納む塔の  
わりなし

【図版3】「大阪毎日新聞」(大正五年七月二四日付)

上田敏博士を悼みて  
與謝野 晶子

まさめには仰ぎ得ざりし君なりき今日の後には見むすべもなし  
鐘なりぬ神か佛かゆふぐもか風か其等に君變り行く  
あたらしく惜しき悲しきこころを云ふわが言葉なご飽き足らぬかな  
殯屋の夕ぐれ時の奥ぐらさ云はんかたなし涙流るゝ  
あなかなしいみじく清きおん娘棺の前に香ひねります  
わが住める天地のはし崩れ初めいかすすべき悲めるなり  
いにしへの世の書にさへさばかりの心憎きは書かず亡き君  
法の庭端蹴なれご亡き君のためたかりしにいくばくも似ず  
しるべなき世界にいますにもあらずなす息にさへ混るご知れご  
谷中なる塔のわりなし其横に博士を納む塔のわりなし

三 与謝野晶子自筆歌稿「輓歌 上田先生のために」解説

既に見たように、「輓歌 上田先生のために」一〇首は、「東京日日新聞」・「大阪毎日新聞」を初出・掲載紙とし、『晶子新集』(阿蘭陀書房、大正六年二月)所収、「以下十七首上田敏博士を悼みて」一七首の前半一〇首と配列も含め一致する。自筆歌稿、初出・掲載紙、所収歌集において、殆ど表現等の差異は認められないが、表記等に若干の異同がある。以下、自筆歌原稿「輓歌 上田先生のために」について、初出・歌集『晶子新集』所収歌との異同を確認しておきたい。

底本は、『定本與謝野晶子全集』一一二〇巻(講談社、昭和五四―五六年)によった(以下、『全集』、歌番号も同全集による)。

引用の傍線は歌稿との表現・表記の異同を引用者が示したものである。「歌集」におけるルビの省略・字体の差異には傍線を引いていない。

ゴシック体―自筆歌稿「輓歌 上田先生のために」翻刻

〔日日〕―初出紙「東京日日新聞」(大正五年七月一九日)掲載

―上田先生を悼みて―

〔大毎〕―掲載紙「大阪毎日新聞」(大正五年七月二四日)掲載

―上田敏博士を悼みて―

〔歌集〕―『晶子新集』(阿蘭陀書房、大正六年二月)所収

―以下十七首上田敏博士を悼みて―

〔欄外〕 輓歌

上田先生を悼みてのために 与謝野晶子

〔日日〕 上田先生を悼みて 与謝野晶子

〔大毎〕 上田敏博士を悼みて 与謝野晶子

〔歌集〕 (以下十七首上田敏博士を悼みて)

まさめには仰ぎ得ざりし君なりき今日の後はた見むすべもなし

〔日日〕 〔大毎〕 同

〔歌集〕 203 まさめには仰ぎ得ざりし君なりき今日の後はた見むすべ

もなし

鐘なりぬ神か佛か夕ぐもか風かそれらに君變り行く

〔日日〕 〔大毎〕 (3) ゆふぐもか (4) 風か其等に

〔歌集〕 204 鐘鳴りぬ神か佛か夕雲かかせか其等に君變り行く

あたらしく惜しと悲しきことを言ふわが言葉など飽き足らぬかな

〔日日〕 〔大毎〕 (3) ことを云ふ

〔歌集〕 205 あたらしく惜しと悲しきことを云ふわが言葉など飽き足

らぬかな

殯屋の夕ぐれ時の奥ぐらさ云はんかたなし涙流るる

〔日日〕 同 〔大毎〕 (5) 涙流るる、

〔歌集〕 206 殯屋の夕ぐれ時の奥ぐらさ云はんかたなし涙流るる

あなかなしいみじく清きおん娘棺の前に香ひねります

〔日日〕 〔大毎〕 (5) 香ひねります

〔歌集〕 207 あなかなしいみじく清きおん娘棺の前に香ひねります

わが住める天地のはし崩れ初めいかがすべきと悲めるなり

〔日日〕 〔大毎〕 同

〔歌集〕 208 わが住める天地のはし崩れ初めいかがすべきと悲めるな

り

いにしへの世の書にさへさばかりの心憎きは書かず亡き君

〔日日〕 〔大毎〕 (4) 心憎きは

〔歌集〕 209 いにしへの世の書にさへさばかりの心憎きは書かず亡き

君

法の庭端嚴なれど亡き君のめでたかりしにいくばくも似ず

〔日日〕 〔大毎〕 同

〔歌集〕 210 法の庭端嚴なれど亡き君のめでたかりしにいくばくも似

ず

しるべなき世界にいますにもあらずなす息にさへ混ると知れど



〔日日〕〔大毎〕同

〔歌集〕211しるべなき世界にいますにもあらずなす息にさへ混ると  
知れど

谷中なる塔のわりなし其横に博士を納む塔のわりなし

〔日日〕〔大毎〕(2)塔のわりなし(5)塔のわりなし

〔歌集〕212谷中なる塔のわりなし其横に博士を納む塔のわりなし

以上、「薄田泣菫文庫」の内、与謝野晶子自筆歌稿「晩歌 上田先生のために」を翻刻・紹介した。一〇首全てが新聞二紙に掲載され、『晶子新集』にも所収されているが、「大阪毎日新聞」掲載の経緯を泣菫宛の晶子自筆書簡が示している点でも、貴重な資料・事例と言えるだろう。